



臨床に活かす病理診断学 第2版 消化管・肝胆膵編

福岡敬宜，二村 聡●編

画期的な病理診断学の学習機会を与えてくれる一冊

評者

角谷 眞澄

信州大教授・画像医学

福岡敬宜先生，二村聡先生編集による『診療・研究に活かす病理診断学——消化管・肝胆膵編』が，「より一層，臨床の現場に病理情報を届けるため」に改訂され，『臨床に活かす病理診断学——消化管・肝胆膵編（第2版）』として医学書院から上梓されました。B5判の283ページからなる病理診断学の解説書ですが，病理写真はオールカラーとなり，見出しにもカラーが加えられ，とても見やすい教科書に華麗に変身しました。

改訂版は初版と同様に，入門編，基礎編，応用編，資料編に分かれています。入門編では，病理診断を概観した上で，病理検体の扱い方，病理組織診断から報告書の作成と進み，迅速病理診断や細胞診へと続きます。初版のコラムにあった「FAQ」がここに内包され，全体を30問のQ&A形式にし，病理診断を臨床に活かすポイントが「ざっくり」と書かれています。

基礎編は2章に分割されました。基礎編(1)では，臓器・病変別に検体の取り扱いと病理学的アプローチが扱われていますが，疾患名の網羅ではなく，実臨床で遭遇度の高い疾患や重要度の高い疾患を中心に内容が厳選されています。臨床医として「知っていれば得する」，まさに本書のメインコンテンツです。基礎編(2)では特殊染色が扱われ，組織化学検査と免疫組織化学検査の基礎的知識が記載されていますが，ヘマトキシリン・エオシンによる病理組織診断に立脚して初めて特殊染色の威力が発揮できることが強調され，染色方法の選択と結果解釈も具体的に示されています。まさに「病理に強い臨床医」になれる内容で，読み応えがあります。応用編では，初版と同様，病理診断を研究に活かすポイントや学会発表・論文投稿に役立つ病理写真の見せ方まで伝授してくれています。最後の資料編では，「病理診断関連用語」数が125から158へとパワーアップしました。また，「正常組織像アトラス」がカラー写真となり，抗体早見表が新たに追加されています。折に触れ，多角的に知識を想起したり確認したりするのに，「ますます便利」になっています。

随所に配置された4種類のコラムは，内容の大半が新しくなりました。「ここがホット」では各分野における最新事実や学術的争点がわかります。「耳より」ではちょっとした豆知識がゲットでき得した気分になります。「Coffee Break」で一息つきましょう。「FAQ」に代わって「臨床と病理の架け橋」が新たに加わりました。どのコラムも楽しく読めて学習意欲をかき立ててくれます。

私は放射線診断専門医で，肝胆膵領域の画像診断を中心に診療・研究に携わっていますが，病理診断と画像診断は表裏一体で，診断への思考過程には相通ずるものがあります。本書の至るところに登場する「側注」に込められた病理診断医の本音やつぶやきも見逃せません。病理診断学の深い部分が語られているのですが，私にとっては画像診断学へのヒントが満載です。

画像診断医にとって，病理診断を学び，その知識を画像診断に融合させることは，患者に貢献するために欠くことのできない作業です。しかし，学会や研究会で病理医の診断やコメントを拝聴しながら病理組織診断の知識を学び取っていく方法は，時間的制約が大きく，残念ながら効率が良くありませんでした。そんな私にとって，本書は「目からウロコ」であり，画期的な病理診断学の学習機会を与えてくれる至高的存在になっています。

本書は，主に消化器系の診療と研究に携わる臨床医向けですが，短時間に実践的な消化器病理診断学の知識や手順を習得したい臨床検査技師，一般病理医，臨床実習中の医学生にもお勧めです。専門が異なれば利用法も違うでしょうが，本書はどなたにも十分満足のいく内容であると確信します。カラフルにバージョンアップされた改訂版で，魅力にあふれた病理診断学の世界に浸ってみましょう。

●B5 頁300 2011年

定価 8,925 円(本体 8,500 円+税 5%)

[ISBN 978-4-260-01095-5] 医学書院刊